

黄色テープ

郡上高校 P N 兎東 作哉

人は暗闇を嫌う傾向がある。非現実的なもの例えばお化けとかそういうのも嫌う傾向がある。暗闇が嫌いなのは、視覚情報が制限されているから。何がいるかわからないから本能的に危険と身体が自然と反応するのだ。お化けなんかは対処の仕方がわからないから。熊だつたら死んだふりをすればいいなんて(これは嘘であつたが)対処方法がある程度わかっている。

でも、今回は違う。暗闇やお化けなんかじゃない。明るいとこに現われた目に見えるもの、私が遭遇した奇妙なテープについて話をしよう。

いつも通り私は通学路を歩いていた。歩きなれた道。犬の散歩中のおばあちゃんや、スーツ姿で自転車をごくサラリマン、道ばたの綿毛はもう風で飛ばされて裸になっていたがいつも通りの朝だつた。私の中学校は集団登校ではないので、私はまだ少し暗い朝、家を出る。昼間の賑やかさが嘘のような静かな朝が私は好きだからだ。

鼻歌を歌いながら歩いていると、見慣れた電柱に檸檬のようなパキツとした黄色テープが巻かれていることに気がついた。昨日はそんなテープ巻かれていなかったのにな。と、私はテープが巻かれた電柱の反対側を歩きながら学校へ向かった。黄色テープは風でゆらゆらと揺れていた。

学校もいつも通りだつた。でも、今日は一寸怖い先生が問題文を読み上げるとき囁んでいた。笑つてはいけなないと、クラスの皆笑いをこらえていた。部活があると思つて学校にきていたが、部活仲間に「今日はないよ」と言われ、顧問が出張だつたことを思い出した。だから、仲のいい友達二人と久しぶりに帰れた。帰り道、またあのテープが目に入った。何か増えてた。二本になつてる。

テープに気を取られていると、友達二人に置いて行かれた。けっこう距離が出来ていた。だから、そんな変なテープの事なんてへんてこりんな雲が浮かんでる……ぐらいいか気にならなかつたから、黄色テープの横を走り抜けて、二人の友達を追つた。

次の日も、同じ時間に家を出た。いつも通りの通学路。そして、その通学路の見慣れた電柱に昨日の黄色テープ。また増えていた。今度は三本。色鮮やかを通り越して、目がチカチカする彩度高めの黄色テープ。テープは風が吹いていなかったのにゆらゆらと揺れていた。別に害はないし、と私はまた道路を挟んだ反対の道を歩いて学校に向かった。

帰り道、またテープは増えていた。次の日も、また次の日も。だんだん電柱が黄色テープに染まっていく。初めは道路工事のための目印に付けていたテープだと思つていたけど、どうやらそうじゃないらしい。

また部活がない日、友達と下校していると友達の一人が、

「あのテープなんだろうね」

と指さした。黄色テープはおびただしい数になっており、無視することが出来ない存在となっていた。もう一人の友達が言う、

「あれ、増えてるよね…、でさー昨日のテレビの話」

友達は一瞬黄色テープに興味を示したが、すぐに話題を昨日のテレビの話に変えた。年頃の女の子にとつて、電柱にまかれていた黄色テープよりテレビの話題の方が盛り上がるのだ。きつと男子なら話は違うだろうけど。私は黄色テープを横目で見ながら、友達二人の話に混ざった。

次の朝、いつもより早く起きてしまったため、いつもより早く学校に向かうことにした。いつも通りの通学路。違うと言えば犬の散歩中のおばあちゃんや、スーツ姿で自転車をこぐサラリーマンがいないことだろうか。でも、あれはまだあった。いつも通りの場所に。もう見慣れてしまった黄色テープ。

「あれ？」

いつも通り通り過ぎようとしたが、黄色テープが汚れていることに気がついた。泥でもついたのだろうか。いつもは近寄らなかつた黄色テープに近づいた。近くで見ると初めてだった。揺れる黄色テープの一本を掴み、私は違和感を覚えた。黄色テープだと思っていたが、黒い紙を隠すように粘着質な黄色テープが貼られていたのだ。

「ひ」

と、私は小さく悲鳴を上げる。黒い紙だと思っていたものが違ったから。所々白い余白が見える。黄色テープの下の白い紙にはびっしりと黒い字で「死ね」と書かれていた。私は逃げるように駆け足でその場を離れ学校に向かった。

それ以来、私はあの黄色テープに近づいていない。でも、その黄色テープはまだあそこにあつて、また増えていた。

いつも通り、揺れているのだ。